



図2. ガマとコガマの穂(花後), A. 大形のガマ(北海道産), B. 小形のガマ(兵庫県産), C. コガマ(広島県産)

ると著しく縮むのが常である)。

これらの変異資料を見ていると、集団内の変異に注意しておれば、小形のガマ個体をすぐにコガマと誤ることはないと思うが、ガマのように身近な植物の同定にも意外な落とし穴があるのである。

なお、最近、ガマとコガマの雑種として、アイノコガマが記載報告された(清水, 1989)。花粉はコガマのように単粒である。雌穂が不稔で奇形になることがしばし

ばあるという。

【付記】もし不審なガマ(?)が近所にありましたら、花序(標本でも生品でも可。できれば花粉のついたもの)を私宛にお送りいただければ、同定致します。

引用文献

清水建美, 1989. 日本産植物数種の新学名. 植物地理・分類研究 37:120.

中国山地にもヒメバイカモ

角野康郎

ヒメバイカモは、比較的まれな水草で、今までに報告されている産地は、私の知る限り宮城県、千葉県、熊本県、大分県のみである。

ところで、中国山地のバイカモ(ヒルゼンバイカモ)の調査を進めていくうちに、島根県と山口県の県境に近い島根県六日市町の高津川にもヒメバイカモが産することを確認した。最初に気付いたのは、1987年8月であるが、昨年、松江の水草研究会全国集会のあと、広島へ抜ける際に寄り道をして現地を再訪してみた(7月31日)。1987年の調査時よりも群落は広がり、ちょうど花盛りの時期でもあったので、見事な光景であった。他の既知産地のいくつかでは、消滅したり消滅寸前の状態なので、

この群落の現状はたいへん嬉しく思えた。

○岩槻邦男著『日本絶滅危惧植物』(海鳴社、1990年3月31日、227頁、1700円)

前号で紹介した『我が国における保護上重要な植物種の現状』(レッド・データ・ブック)とあわせて読んでいただきたい本である。何が植物を絶滅の危機に追いやっているのか。そして、その現実に直面して我々ひとりひとりが何をなすべきか。著者は切々と訴えている。

(角野康郎)